

氏 名 小那覇 M. セシリア

学位（専攻分野） 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第239号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 アルゼンチンの日本人移民の歴史

-自由移民と日系社会形成-

論文審査委員 主査教授 石井 紫郎  
教授 濱口 惠俊  
教授 白幡 洋三郎  
教授 石川 友紀（琉球大学）  
教授 戸上 宗賢（龍谷大学）

## アルゼンチンの日本人移民の歴史 ---自由移民と日系社会形成---

### 1) 論文の目的

1980年10月現在、世界中でもっとも多く日本移民及び日系人を有する地域はラテンアメリカ諸国であり、海外の日系人全体の54%を占めている。

第二次世界大戦前日本移民を受け入れた南米諸国の中でブラジル、ペルー、アルゼンチンのうち、ブラジルやペルーと異なり、アルゼンチンの移民は自由移民で、その大部分がペルーやブラジルの拓殖会社における農奴としての労働と生活状況から脱出してきた人々であった。この計画移民のなかったことがアルゼンチン日系人社会の歴史的特徴である。南米における日本人移民はブラジルやペルーの契約移民と、アルゼンチンにの自由移民という二つの大きなグループに分けられる。

本研究では自由移民としてのアルゼンチン日系社会を対象とする。

### 2) 問題提起

本論文では、二つの問題を取り上げている。一つは移民研究の基本的問題点であり、移民した人々の動機、行き先の選び方、そしてタイミング（時機）を明らかにすることである。特にアルゼンチンは自由移民の多い国として、重要な課題を提供している。そしてもう一つは、アルゼンチンの日系社会の形成と経過、一般社会における日系人社会の発展過程を考察したいと思う。

第一の問題について、アルゼンチン共和国は南アメリカ大陸最南国である。なぜ19世紀末から日本人はこの国を選んで、移民したのだろうか。答えは当時日本人がもっていたイメージにあると思われる。当時のアルゼンチンは、「世界の穀倉」と呼ばれたほど優れた未来の国というイメージであった。しかし、当時のアルゼンチン像が日本人移民に対しどのように影響を与えたか、移民の動機に関する研究は行われていない。なぜ大多数は沖縄県出身で、第二位は鹿児島県出身者だったのか。このような偏差は何によるものなのか。また、大多数がブエノスアイレス市とその近辺及び他州の都市に集中していた。これをみて、都市移民だったと位置づけることが適当かどうか、という諸疑問点がまだ明らかにされていない。このような観点に基づいて調査分析を実施したことに、本研究の意義がある。

そして、第二の問題に関して、文化的複合社会のアルゼンチンにおける日本移民には、永住の意志をもって渡航した人々は少ない。機会を見つけて帰国することを意図した、つまり出稼ぎであった。1940年まで、日本人はアルゼンチンに生まれた

子供たちだけを日本に帰して、日本で教育を受けさせるケースが珍しくなかった。しかし、戦争とともに、日本へ帰国することの夢が失われた。

一世の人々は日本にいる親類縁者と何らかの接触を現在も保って、日本の伝統を大切にしたいという希望があり、特に日本人の価値観を次世代を構成する子孫に対して残しておきたいという期待を抱いている。

一方、現在日系社会の構成員は大部分がアルゼンチン国籍をもっている人々であり、一般社会で活躍している。他のアルゼンチン人と同じ移民の子孫として、母国-祖先の国-の文化を自分のアイデンティティの一部としており、また同時に共通文化であるアルゼンチン文化を享受している。相対的にみて、現在日系人はアルゼンチン社会の中産階級 (middle class) に位置して、経済的に安定したといえよう。

ラテンアメリカ各国における日系人社会にはこれと同じ現象が見られる。アメリカ合衆国の場合は、日系社会の経済的成功は、日本人が〈受け入れ社会〉に早く順応しつつも、日本的伝統を保持していることにあるという、アメリカ人研究者による仮説がある。

エスニック・グループの生き残りとそのグループの経済的成功の蔭には「日本の伝統」があったと指摘されている。しかしこの場合「日本の伝統」の意味が、明確ではない。つまり、実際にアルゼンチン日系人社会の教育水準の高さ及び経済的向上は日本に源をもつ文化的要因にあるかどうかを検討する必要がある。

### 3) 論文構成

本論文はアルゼンチンと日本両方の観点からみる日本人移民史を検討し、的確な解釈を試みたいと思う。そのため、第一部は歴史的背景が提起されている。そこに相手国としてアルゼンチンを紹介してから、移民のプロフィール、移民の動機、最後に日本国内、移民相手国及び国際状況と移民数変動との関係を検討したいと思う。

第二部では、収集した資料から移民の声を通して、彼らの体験を検討した。そして第三部では日系社会の誕生に焦点を集めて、日本人移民が定着時期に入ってホスト社会との関係が深まると共に現れた問題（持ち込んだ文化の保持、子供の教育）を観察する。最後に日本人移民が持ち込んだ文化体系はどのように変容したか、日本人移民はいつ「日系人」になったかを考察したいと思う。

付論ではアルゼンチンの日系社会において実施したアンケートの結果を紹介する。

(論文審査結果)

本論文は、アルゼンチン（亜国）の日本人移民の歴史、並びに他の南米移民との比較におけるそのエスニック集団としての特性を、日・亜両国サイドの史料と現地調査とに基づいて解明したものである。

先ず「序論」では、分析上必要な概念や理論を検討し、またこれまでなされた先行研究のオーバービューを行なった。第一部「アルゼンチン日系社会形成の基盤」においては、受入れ国としての亜国の移民政策史と、そこにおける日本人の社会的地位について述べ、さらに日本人移民の統計的動向を本国と亜国双方の資料に基づいて調べるとともに、出身地・職業・教育水準など質的データをも検討した。移民たちの動機についても、国の政策、地域における移住志向性、マスコミの影響などに関わる社会的動機と、移民たちの経済的なプル・プッシュ要因とを、統計資料に基づいて推測した。また移民数の増減等、時代的変遷をも綿密に調べ、亜国における日本人移民の基本的性格を明らかにした。

第二部「日本人移民の語った歴史」においては、明治期に移住した先駆者インテリ移民の伊藤清蔵博士についてのケース・スタディを行ない、さらに大正時代に多かった南米他国経由の「間接移民」、親類縁者や出身地域から呼び寄せた「連鎖移民」の実態を、とくに沖縄県中城村からの移民を対象にして、精密に分析した。また農業（花卉・蔬菜等の栽培）に従事し、地域にうまく定着した諸事例についても記述している。

第三部「日系社会の誕生」では、そのような日系移民が、経済的にも成功して、亜国において教育水準の高い中産階級を構成するに至った経緯、またいかにして「日系人」(Japones) と称されるエスニック・アイデンティティを確立しえたか、を論じるとともに、「付論」においては、日系一世、二世、三世、白系人に対して実施した、対人関係観に関するアンケート調査のデータを統計学的に分析し、一世に多かった個人主義的志向性が、その小ブルジョア（自営業）的性格を示すものと解している。

以上の考察によって、アルゼンチンにおける日系移民が、もともと政府間協定に基づく「計画移民」ではなく、むしろ「自由移民」が主体となっていたこと、また本来知的・社会的水準の高い自営業志望者が多かったこと等が今日同国での安定した日系社会を確立する上での基本的要因であったと結論づけている。

本論文には、他の中南米諸国の日系移民との比較が足りない、また1945年以降の歴史分析が必ずしも十分なされていない、などの問題点が残されている。しかし、アルゼンチンの日系人移民史を、自ら発掘した豊富な統計的資料を駆使し、具体的な家族生活史のケースワークを綿密に行ない、さらに自ら実施した調査フィールド・ワーク・データの統計学的解析を通して、まだ誰も行っていない形で総合的に論述したものである。そのオリジナリティは顕著であり、また分析水準も極めて高い。日系人三世である本人にとっては外国語である日本語によって、367頁にも及ぶ本論文を記述・作成した努力も高く評価しうる。よって審査委員会は、本論文を博士学位論文に十分値するものと判定した。